



平成26年2月28日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第44回）及び 首都直下地震モデル検討会（第26回）合同会議 議事概要について

1. 検討会の概要

日時：平成25年9月30日（月） 13:30～15:30

場所：中央合同庁舎第3号館 防災A会議室

出席者：阿部座長、入倉委員、金田委員、平川委員、平原委員、福和委員、古村委員、翠川委員の南海トラフの巨大地震モデル検討会の各委員

阿部座長、平田委員、福和委員、古村委員、翠川委員の首都直下地震モデル検討会の各委員

2. 議事概要

最大クラスの強震断層モデルの長周期地震動の計算手法などについて事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

【首都直下の地震に関する検討】

○江戸時代の過去地形を地盤データに反映する場合は、DEM等で高さを確認したりしながら評価してはどうか。

○プレート内地震の工学的基盤における震度について震源から離れた北側で東西に縞が生じていて不自然である。また南北に延びる断層が南端から北に向け破壊するという破壊形態からは説明できない。何か別の原因があるのではないか。

○最大クラスの津波において、東京湾は入口が極端に狭いから波長の長い波が入りにくく、浅いので、壁にぶつかってしまうような感じで、津波が全部跳ね返されてしまうため、湾内の津波高さを高くしようとしてもならないのではないか。

【長周期地震動に関する検討】

○結果の公表について、何通りかの乱数の中の最大や平均等、出すときは1個にしたほうがいいと思う。この乱数の変化というのはあくまでも計算上の問題であり、同じ震源モデルでも破壊開始点やマグニチュードの大きさ等で1桁変わる。破壊の方向や、マグニチュードで変わるといことを書くほうがよいのではないか。

○公表する想定波形が1つの場合、その波が建築設計の中で独り歩きするおそれがある。幅が

非常にあるというメッセージを必ずつけておかないといけないだろう。利用者は、特定のエンジニアであり、どう取り扱われるかということのを頭に置いて出し方を工夫するといいいのではないか。

○ばらつきが非常に大きく、その要因が幾つもあるが、それをどういうふうに整理して世の中の人たちに理解していただくということは重要で、わかりやすい整理の仕方を議論しないと結果が倍半分ではおさまらないのではないか。

○パラメータを全て決めた後、あとはランダムにするという計算を行っているが、計算結果の σ は平均の数割程度でそれ程は大きくならないと思う。計算結果を無駄にしないためには、 σ や平均値を計算した方がいい。これは技術的な問題で、科学とは全く無関係な偶然性に支配されて、偶然性自体がある種の科学の限界の1つになるので計算すべきである。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199